

例年、年末年始休みは出雲にある実家へ帰り、母親と私たち夫婦の三人で新年を迎えることにしています。普段は築半世紀以上経つ実家に母が独り暮らしをしています。今は何とかなってはいませんが、あちこちガタのきた家と年寄りをいつまでも放つとくわけにもいかず、とはいえ退職まであと一年半あるので通勤の都合上今の時点では同居もままならず、せめて一緒に正月を祝うことくらいしかしてあげられることはありません。

実家は島根半島の西の外れの田舎町にあります。昔は家の近くの細道が国道から出雲大社への抜け道になっていたので、大晦日の夜からは初詣客の車を通る音でそこそこ騒々しかったのですが、バイパスやら高速やらが整備されるとそれもなくなり、静かで良い反面一抹の侘しさを感ずるようにもなりました。

いつも変わらぬ正月で退屈の花が咲くのがオチですが、今年は嬉しいことに可愛いお客さんがやってきました。県外に住む長女が五歳になる孫娘を連れて帰省してくれたのです。本来なら夫さんの実家へ帰るところですが、現在単身赴任中で正月休みが無いので二人でこちらへ来ることになったのです。めったに孫と会えぬ身としては一週間近くも一緒に

過ごせるとは望外の幸せです。ひと月前に娘から連絡があって以来、ジュニアシートや布団などの用意をしてジイジババとヒイババの三人で、それはそれは首を長くあぐくして待つておりました。

元日の午後、妻と二人で出雲空港へ迎えに行きます。到着口に現れた二人の元気な姿を見て安心し、安全運転で実家へ向かいます。しかし和やかな車内の雰囲気も束の間、突然テレビ番組が緊急地震速報に切り替わりました。画面に映された日本地図の日本海側は東北から今私たちがいる山陰沿岸までが点滅し、津波が来るから避難しろ！とアナウンスが連呼しています。海岸から実家までは一キロばかりありますが、流石にこの只ならぬ様相に動揺は隠せません。幸い山陰地方に実害は無かったものの、能登地震の悲惨な状況に目を覆うばかりでした。

そしてあつという間に日々は過ぎ、二人が帰る日がやって来ました。空港のロビーは二日の衝突事故の影響でしょうか、羽田行きの乗客でごった返していました。とりあえず無事に過ごせた安堵と感謝の思いを胸に二人を見送りました。

被災された方達が少しでも早く穏やかな暮らしに戻れることを願っています。

空き家 6

木幡智恵美

墓②

実家の元屋敷跡にある墓が現在のような寄墓になったのは、母が亡くなって半年後のことだ。それまでは、墓地にいくつもの墓石が建っていた。中には丸い石だけが置かれたものもあり、土の下にどういふ人が眠っているのかは分からない。その一つ一つに花ノ木を立て、線香を供えていくのは大変だった。

家を守るため、昼夜なく働いて借金返済をし、命を縮めた母。その母が生前「墓を何とかしたいね」と言っていた。母が掛けていた生命保険があり、それで借金を払い終わった後、残ったお金で墓を寄墓にすることを決めたのは、家を守り通した母が、祖先が眠る墓を何とかしたいという思いを叶えたかったからだ。

父方の伯父に紹介してもらった石屋さんをお願いし、大型連休に入る前に寄墓作りに取り掛かってもらった。その作業中のこと、石屋さんが言われた二つのことが今も忘れられない。一つは、十年以上も経つのに、祖母の遺骸がまだ白骨化していなかったこと。どうもビニールに包まれたままだったようだ。焼いて骨にしてくださいだったとのことで、その難儀な作業を思うと申し訳ない気持ちで一杯だった。もう一つは、「ご先祖さんに、お産で亡くなられた方がいますね。周りの土が赤くなっていましたわ」という話。確か、祖母の妹が産後の肥立ちが悪くて亡くなったと聞いたことがある。土に埋められても出血を続けていたということか。土が最期の様子を証明するとは驚きだ。

祖母が亡くなった時までが土葬だった。その頃は、棺桶の言葉通り、風呂桶のような形の桶に膝を抱えて座った姿勢のまま亡き人を納めた。だから、墓堀に当たった人はかなり深く土を掘らねばならず、重労働だったと思う。そして、埋葬して時が経つと、地面がぼこつとへこむ。棺桶が朽ちて崩れるからだ。土葬の頃にはそういうことがあるから、火の玉なども含め、おどろおどろしい話が生まれたのかもしれない。

母が亡くなって当分の間は、家も墓も自分が守っていくのだという強い思いがあった。



30代フリーター 寺島実郎が先日朝日新聞で、戦後の日本の経済成長は「敗戦を『物量で負けた』と認識し」てモノづくりで励んだ結果だと指摘していた(1月6日朝刊)。ところが、2010年にGDPで中国に抜かれ、日本人の自尊心が砕かれた、とも。年金生活者 その認識を延長すると、「物量」の生産によってもたらされた近代で最も長い「平和」が、「物量」に頼れなくなった今、危ういところさしかかっているという理解になる。

戦後の高度経済成長がもたらした豊かさは戦争を抑止する力となり、憲法9条の護持を求める国民の意識とシンクロナイズした。低成長の時代に入った現在、豊かさの抑止力に自信を失い、それを軍備の増強で補おうとする焦りが政権担当者らに出てきた。

30代 寺島は「松下幸之助が唱えた『PHP(繁栄を通じて平和と幸福を)』に象徴されるように、何よりも豊かさを追求したのが戦後日本」とも言っている。

敗戦まで「物量」の足りないぶんを「精神」で補おうとして悲劇に突き進み、戦後はその反動で「物量」をたのみとしてきた日本は、いまそれができなくなり、政府は場当たりの政策を重ねるだけになっている。経済ではアベノミクスが、安全保障では軍備の急拡大が、その代表的な例だ。

30代 国民はそれを黙認しているように見える。

年金 事態の変化のとらえ方は政権担当者らとは差がある。

さっきも言ったとおり、政権やその与党、さらに霞が関の官僚らが、豊かさによる抑止力に自信を失い始めた最大の要因は、世界における日本のGDPの順位の低下にある。中国ばかりか、ドイツにも追い抜かれ、やがてインドにも抜かれると予測されている。そんなときに「経済安全保障」が強調されるようになり、政権担当者らの危機感にさらに拍車をかけている。

一般の国民はGDPの順位の低下にそこまでの危機感を持っていないと推

年金 「物量で負けた」という認識は、これまでの国際政治の常識では、次の戦争は「物量で勝つ」という復讐心につながるはずだが、そうはならなかった。「物量」で実現した繁栄を維持するには「平和」が必須となる。何よりも二度と戦争はしたくないという国民の意識が「物量」を戦争に注ぎ込むことを忌避した。

世界第2位の経済大国になったことそれ自体が、他国から重視、あるいは尊重され、武力に頼らなくても抑止力を保てると思えられるようになった。同時に2位の自信が他国への攻撃的な姿勢を抑えた

30代 ところが、その余裕が失われてきた。

年金 弱い犬ほどよく吠えるという。戦う自信がないので、相手を脅して退けようとする。軍拡に走るのもそんなときだ。

日本はそこに近づき始めた。豊かさによる抑止力が低下したと感じ、不安と恐れが自信に取って代わりつつあ

察される。最大の関心事は世界でのランキングではなく、自らの生活そのものだからだ。言い換えれば、国民はGDPの規模や順位といった数字よりも、生活の利便性や快適さといった質的なものを豊かさの主要な物差しにしている。それは、こと生活に関する限り、交換価値よりも使用価値に重きを置いていることを意味する。その物差しから見れば、所得が上がっていき

る。それを補おうと、岸田政権が打ち出したのが防衛費の大幅増額や敵基地攻撃能力の保有だ。それらは、GDPで日本を追い抜き、それによって「物量」による抑止力を削ぎ取った中国に向けられている。

30代 高度経済成長の時代にはもう戻ることができない。

年金 高度経済成長は第2次産業を牽引車とした産業資本主義の段階に特有のものだ。そこでは、モノの大量生産、戦後の日本人が追い求めた「物量」が幅をきかせた。それは生存に必要な負担を飛躍的に軽減させるので、大量の需要が生まれた。それがGDPの急膨張を生んだ。

その時代が終わり、第3次産業を牽引車とする現在のポスト産業資本主義の段階では、モノよりも知識や知恵がものを言う。それらは生存の負担を軽減するよりも、プラスアルファの利便性を提供するものが多いので、産業資本主義の時代ほど大量の需要は生まれない。成長率の低下は避けられない。

でも、技術の進歩や社会インフラの拡大、行政の諸制度の整備などによって、暮らしやすさを享受できることになる。

だとすれば、GDPの順位低下を完全保障上の抑止力の低下にとらえ、それを軍備の増強で補おうとする政権担当者らの発想を国民は手ばなしでは歓迎しないはずだ。たしかに、中国の軍拡に対してはある程度の防衛費の増額はやむを得ないと考えているだろう。しかし、中国の軍拡に軍拡で太刀打ちできるものではないことは百も承知であり、むしろ岸田文雄らの主張する憲法9条の改正が「見えない抑止力」の喪失につながることを警戒していると推察される。

30代 麻生太郎は「戦う覚悟」が中国への抑止力になると言う。

年金 「物量」の足りなくなつたぶんを、ふたたび「精神」で補おうとするなら、かつてのような「戦争」ではなく「平和」の「精神」でなくてはならない。それがいま最低限言えることだ。

ニュース日記 907
中村 礼治

豊かさの綻びを軍備で繕う岸田政権